書素養句集

竹堂

門人世尊の十大弟子と尊ばれ侍るなり
れたる人なり智恵第一孔子何神通第一
孔子とうやまふ事を孔子一ツ〳〵教へ給ふに
徳のおとれる事孔子乃十哲とてかしこき
人〳〵孔子の中をうけ給ふ徳行を後言語を
雖と已〳〵の道の有りをを芭蕉
翁乃孔雀孔門人を乎角を孔句孔庵
やうの丈をを静の枝を牧く土芳を
鮮古ををを〳〵き事正義を奇の支考を
かををけをを古を来孔諧をしめを已〳〵好を

句稿の一をしるすりてかき為乃うるしに写し
傳ふるなり　これ芭蕉一人の為ならず
出すうくそ孔句稿のかたり為れや世尊の
十大弟子孔子孔十哲乃中にひろくさられも
そ孔門人多うる中にも関東ハ甚角嵐雪
といひ冥西ハ去来ハ多く雖弟雖之の
上足ちれも中角嵐雪を孔雖を孔ものち
業にしたがひ名利孔境ハ遊へさをそ孔流れを
汲む業し多くて其角ハ五元集嵐雪ハ玄
峰集をつへる家の業ありて世ハつふさ孔

去来ハ字を蕉翁孔直指孔むかひ為弟子
孔雖の名利を浦くいとひて弟子拙翁微
笑孔ふふをよく傳くて一家の傳書を著を
一人孔門人孔をめき孔をやして孔農句を書
集へき人も孔しこ孔窺こふ為を蕉翁乃
孔雖の弟子孔ふへ孔弟子ふしころ也二人の孔
雖を走るひ字嗟嗟世ハ事の花ハ逐ひて
を惜ハちうき嵐山と吐して彦柿舎ハ
むうしをふふ栗津の浦孔秋の月孔れてを
秋のもるや東孔菴ふ御て孔孔先の孔

家とちらくうしこるまし家る里に出こる
書につ名ら農白を久しく元農孔底に
かくし道しをこ孔古詩嵯峨の金厚繁僅
孔魯江の二法師写んこをあるこのちに
らしかと名ぬるよ尼をしむうををや窓の
あへ出していをつるよ古人孔んよ皆くるちのん

明和い年卯の春三月東山吉峯孔里

五柳菴にて蝶夢記

去来姓を向井名を兼郎字を元淵と把
前出時孔人なり彼地の聖也泰源乃
毛族よりて世く儒を業と出博く書を
ち文歴学をきまを名詩歌を歌ふ中に沈
勇ましる猪猪を刺を都よりをり今何
のし孔殿下よ仕へまる宦徳の時まて芭
蕉翁よ陪ふして紀行の九雅を学ふ鴨川
孔東聖護院村よ住りまき嵯峨孔小倉山の
麓よ別荘をいとちまて行通ふ事紀のころ
庭よ梯の高しをとくをを孔居を高柿舎と

名つく蔦寺内府ゑりを北之字を隠
寛永元年の秋九月十日没を養を来
山荒めまゝあり今北高柿舎を伐れ
ゝ重厚再興して今高也

去来農句集

春

元日や家々傳り北太刀常人
元日や土つゝふし蕗彩も生
蠶形てを逢しふても花の書
高人の京吉ゆさゝ伊勢路哉
莨菪よりけてかさ法や麦の油
茅巻やたゞよりて松乃陰

月雪はしらめども　さゝし門の松
獨り寂もたまはる人初子哉日
わら葉つゝ　為り哉らうさん俤
嘆嗟まてあり曙か
寺や祝ふ丹波の麻を俵にて
筆は　峰や　鉾ひろふ　庭まも
うくひすを乃ゝ　言つゝ　ちゝ　為　二三日
鶯や内のも　峰と　地　うゝ　寺　宗
芳香　沈　ちく　くそこに　楽　寿　う　面
うゝひすの　為　ゝ　言　や　谷　の　巣

寺や　雀　よ　ゆ　ゝ　枝　つ　楽
蕓　鶯　ゆ　ま　い　峰　ひ　う　ゝ　ま　の　音
風　ゆ　ゝ　寺　ゆ　寺　ま　ま　ま　と　為　よ
然て出るに
うゝひすゝ人の出ゝ梅う清
梅をて〻寺さく梅ゆ　ひ　ひ　ゝ　ル
上簡の山　為　ま　し　し　ゝ　ゝ　子
俵ゝ俵りて
掛こう寺や山　踏ゝ入る大の寺
寺　滝や海ゝう　寺　て　ゝ　ま　ゆ　花

五六ばかりて走さ出し 柳う南
意して人をもこのせるやちきれ
事物の書いるる遊ふ 扱戸うえ
姑乃家をのる人を 柳う紙
角紙しきよ 闇のけくの 朧 月
紙 書まき事ぬ 夜をもれを紙ある
法より孔文の返した
紙 自一を つ手 ちれう那
弁慶町 所へ 帰りる
をを 多川 中 ちれり 機 月

帰出しに 来てきたうまを 備の意
うき友ようまれ 猫孔 ちるる足
牛 原やこ 延 あれこむ 猫のこひ
いくをへり 多形 岸孔 鮭う市
田孔 硯や 紅を 皆負を なく 鮭
一時を 走ゝ 啼 中む 蟹う那
激つぬ ひゝけと 雄 のかるれ
鮭 乃 木うゝ うるう人 ゝ孔 雄
帰るとあつまる 雁 海のる
遊ふも 行も 走ゝ 葱う鮭

山雀の言葉まねるも別れかな

拝舞や下座に居るも雛

上り帆の淀舟下る

うぐいすや人の畑の男の雨

陽炎やたつく虎の鷲

神鳴や一むら雨のさくら

寒鴉に鳴出されかな水仙

名丸追悼

鶯き声も名残も堅逸の供

まこのを哭

九十年此笑ふ人の恨を化し

そ秋恨を百年乃少を生涯

きても彩名残おしく此一句を

面て寒しうる行年を語り

侍るのみ

寄書名残おしく寒やこと色此生別

花を中つ日為るとき寒るかな

函行の剣をうりて頼政の涙を

雑を練きも人を形ることをかな

使を寒り馬に鞭打ち

佛願寺にて初さくを見て

花ゆへ白き形をつき合せ
知る人とあはしくと花見かな

何ゆへ花見る人乃哀カ
咲花のうき世に人や神ゆへ

ふし墓山きさちゆ方よ見めうり
小袖かな　屋ちゆうしや意の花

一時ゆへ何に山こゝろ　花さくの里
花見もゆへせぬ里のお所寿

湖上に花

花よ今眼入るゝ志賀に浦
立枯の鄙り多さよ　花の中

因上に尾へ花見えるゝて
海を見る　目つきも出来る所

山深くゝ分入りて
木の実に天物も今を花の盃

南都の般若寺にて
数ゝかゝ花や般若乃寺に
数幾も角を新ちり森の花
花　墨とちるや鄙の内に山

[illegible]ふうしや夕[illegible]
つむしろちるや[illegible]　赤[illegible]
[illegible]

[illegible]居

山[illegible]のゆめを　机う[illegible]
[illegible]の根やあけてゆり出す[illegible]
[illegible]も[illegible]つく茶摘[illegible]
[illegible]ひしぼる[illegible]の
[illegible]義仲寺へ詣る
名[illegible]や[illegible]

[illegible]書のも[illegible]
[illegible]
[illegible]

夏

[illegible]と[illegible]や[illegible]と十文字
[illegible]る規
[illegible]
[illegible]代[illegible]や時鳥

吉野にて逢ひ給ふ御少き年
横雲のかゝる山出し花郭公
保昌にまきれ一きの笛と寄
うらびたる文刀や時雨
時雨の宮雲ひかぬ木
西山へ寄て
新芝に咲や内裏に現
鶯の音あらしと宮所寄
初音をぶて
夫も花はあくまで郭公

伊勢にて
白花も海のかさりや鈴鹿山
うの花に絶る雪の山
巡礼のころ
和歌の花に笠掛堂し和歌山
光りあり二ツ山乃歳り
色しの俤とちらす麦畑あと
つゝゝ咲ふ世ゝけや麦畑
鶯しの案内さゝきやうきつゝ
舟乗に一濃留をそゝし花

熊野路にしる人もなき桐の花
元禄七年久しく絶たりしを
祭は行れしを続して
旗鉾小葵となる白山の車
竹の子や扇流悪太郎
武士は子の生長をいはふて
節は時より去るし年は作
淵の水やさりしの五月雨
せましに三日雨む三日ぬれ
大和紀伊の堺をてらし坂にて

此来の順礼となくて笈を事なりぬ
れれも料足つゝとる家はなし 書付らる
てうもてなし坂や五月雨
もとより峠まで
五月雨に沈むや紀伊は八衣田
曲水にはきなれて紫田の蛍
見よ雲のはまに久への往流に
つきて下りぬと話れて行舟を
さしくだしけり
うち花火や黒津は楫見の嶋

螢火や吹とされて鳴る関

蛛の糸やうの糸

夕ぶれ上る岩しく清る水流れ

水札掌や亀泊しる岩ぶ上

鶏もならく村々の鶏なく

石垣ふ苔ぶ咲入るや渕の鮎

尾物の先ふ乱れ出ぬ鯉ぶ

橋寒して寒ふ乱ぬ敷き乱

木陰へ中ふて

山里ぶ敷き蚤年ふ咲ひ

其角北毋乃悼ふ

敷き乱ふ寒たく梅ふ雪

寒宗を敷ぶ鮒や八形大系

谷汲寺ふて

順禮も志ぶや猪ふ魏ぶ飯

すしぶや漁ぶ海ぶ上乃さとふ

主おふく人ふ乱て漁ふ系

涼しさふ夕主ふ入口新

町もしも系ふ水ふ夕寒く

文ふ教を儒ふ猪ふ

猫ぜ子乃中者ものまくこの所
紀伊の藤代越通り名所也
之郎重家ぜ来今よりと中乃
ぬれ丈影の作りしに門築地押廻
伯耆馬こうま立ける矢ぜ根之
いくしぜ紀武士ちりやさ遊ないまし へぜ
弓掛松とて古木今もあり
藤しぜ誘ひ こひしき門よ立まくこ
海東生ぬ也て善光寺ぬ来 長崎の所
まくしこも野山よりつ陸念佛ける

少まくこ花多起しぜ帰りける
まくくに梅れ丈涼しき夕の秋
葬乃こ奥よりける暑う那
石も木も熱に光り暑う分
義淵の庵住人見ぜ松まま
てるあつく照や人足乃松ぜ風
仮うへよ人足の松の緑ぜ
同こ國まて
友うけて美素こくぬ暑う風
茶うこれぜ出て風の暑の素

書すりや義のひゝへ孔雀の山領
夕ゝれば元ゝ[illegible]ひゝ[illegible]
伏見の舟中より都の方を見て
乃立乃雲ゝうゝ立て[illegible]の雲
六玉川歌記あり
六玉川言葉ゝ　水を清水の
鶯音て疲ゝさめゝ人土用干
水を身に孔雀のゑゝし秋生時
伏見市乃筑紫より上る
むゝゝ里へ一ゝ　畑に姫り菊子

夕影や名を惜しむる花に形
酒を飲ゝ屋を移せし月
門賣も孝自由ゝ裏ゝうゝ

秋

鶯ゝふゝて初秋に日数ゝ
うゝ雀ゝ弱のうゝゝゝ孔河
酒造ゝゝくて酒のむ客むゝ
筑前の黒崎ゝ戦場の

あるとも沖より出て雨に北踊し

佳るとゝろを味ふ

七夕をまけてやあるいう舟踊

老いたる氏遠まて遠又北書始の

まこゝろふと七月七日のまを佳りける

星時砂明まて

うちつけよ星まつり影や浦北方

魯町ゝ許まる

山女や焉入り末岸を むこ

蕎麦の裏ちうしや新の頼

書よお乱るる人孔許まて

森道をうしくやうき 蕎まる

魚鳥と時ふ帰りける

尺ゝ人を孫子ゝ寄りて蕎麦

踊子よ望を知乃高めゝ人

新蕎や秋を庫北持参

秋の日北かりそめるうゝ乱

初蕎や精の以芝北越上り

蕎麦と風こそゆき木陰出

悼風国

朝夕ふるふる秋袖の露

嵐蘭追悼

ふ賢秋剣うめりり芙秋霞

遊女常盤ふきのうらをうらとて

相しるるる人よりつる

露ふふり也世のふ秋身更れ

芭蕉翁秋奥乃細道を絵にて

そ秋画写の奥よ書付ふ

めれつ千つ拾ヤつりて袖秋露

稲書のうまきせて行間夜ふ

出崎丸山より

ひきつ乃ヤと秋傾城堂うり秋

静ふ仮まふ山りまひとり

淺芽ヤまりりを下き色の赤

ま稲かきヤ人ふをむる山秋淋

田上より

山ふまて魚陰ふ上よ早稲のめ

ふけ稲ふかりと抱つく西瓜ふ

風拾ふ馬飛まふ花まき

ひとふ山まて和ヤ別ふとて

君うまもすしる第へし花さき先
岩端や蓼もひとり月花寂
青さう啞花かハゆき月花の雪
名月や稿さうすいさ桑のうち
名月十海も松りさを山も又花
月又せん伏見の城花捨　蕉
名月やむうの花梯風無さも
蚤さのこ〳〵る文もすせて月見の孔
思い月ま過こむ松乃月又さ赤
蘆くも赤向さん月花され

猫花　蕉ま　ゆく方や明花月
猫嫁かい色作りて初めしま体
息仕ん吉れを
月花こすも我里人乃　芭蕉さん
世俗ま　さ　日され花月
長崎より京に帰るとて
鴉　川や月又の蕉ま川寒さ
也晴赤行亭
浦人を梅ちて海さる月松さ面
長崎より四ま梅庵さつ〳〵さ村

名月やさの方にせまる松こゝろ

園木社なるてかゝはる

くふを簡字

月うつるゝ裾を深さよりゝ秋

中秋の空ゝ形ふを送葬して

うゝ波夜社月もてるゝ地蔵

也時諏訪の社すて前書ゝ

名とさを京てうゝ波も諏訪の月

十六夜や生しうるゝ変社色

弱葉の木葉や出ゝんゝの月

海山を見へて後社月尺こゝ

宰府ゝ納

第秋社白色も神乃光ゝ

一戸や宿も中ゝ弱むうゝ

糸掛の城をさやきゝ小

松ゝ嫁ゝ月ゝ紀 沾ゝ姫

あゝ風や志ゝ木のゝ弦ゝん

秋風ゝ耳の姫ゝ見ゝし ゝ

吉備津宮奉納

秋ゝのせや思ゝ出ゝ吉備の山

所のやゝ小高く森よりうゝ高き角
小屋高やゝ岩よりゆるるこの辺
第庵を推の木枝葉ひろがり
枝おしやゝ寄よ吹き原のこへ
れく山やゝ玉寄つく庵孤寂
伊都岐島にて
こ川澄乃岩かよ立や庵の聳
浦陰やゝ通しゆるるうゝ望
彩おし寄の上は渡りゆ
七月孤寂集より抄

道あ義孤庵を通り所
人くゝへれもあつまいそき
せれとのれるる晩一秋孤なる
書ゝ先侍る
ふ聖ゝ家ういそうしやうゝ鳥
長崎よ板橋のころ
ゆるさゆも今そうう森や渡り
雁うゝの筆ゝるる時彩さし
筑前孤玉ゝ
福岡やゝ賀ゝあゝ原ゝ紀

同月時雨して
笠を忘れて帰る海士や艇つり
先行く北浦を訪ふ
八月中旬のさいきを山うつり
田家
南方と云う東山の乃勝刀
有磯海集撰ひらる時入句
を書つけ送りつるに添て
祝す
警孔堂や聖公ぬぎる春の海
松茸や人よりとる亀孔先
走て神職ふむる人を負て
亀も笑ふ俗稲之助神の秋
経湾津にて
芦孔雀の著るうさや家の猪
雲母寺にて先師孔子をも中
出る庫小
秋を中川同さつ菊の蕾うれ
葉咲き亥孔 犯のかさりや山畑
筑前特産にて

葉孔雀のよりもれて森たや濱底

自題彩柿舍

柿ぬしや 猶きちゝの身あり山

唐柿舍感偶

柿賞や 尺れとぬいる 黄素麦

芽立より二葉よ去る 柿の実と

よ家ゝ 彼もいり孔ゝ 有

ゝ人 彼 彩柿舍もちこちらし

配うて 蔓る 柿孔 ゝ葉も 森間の 孤

老 涛ゝ そ 支 麦 遠 を 京 孔 ゝ

きゝ 毎つゝられ

息 ゝ孔 蔓 ゝ 間 きん 嗟 咏 の 柿

木孔 きゝ ふ 魚 生 ゝ み 木 孫 し

南 坊 ゝ て

法 山 乃 葉 麦 白 ゝ 人 や 孫 ゝ 姫 く

唐 人 孔 孔 ゝ て 有 ゝ て 人 孔

ゝ れ ゝ る ゝ

嗟 へ ゝ も ゝ 川 屯 孔 ゝ ゝ ゝ 孔

葡 孔 説

西 枝 持 ゝ へ ゝ る ゝ 栗 孔 葡 ゝ も

續甲陽軍鑑

あく菊 菊に侍農の義士を中間に

也き夜も 稿 多以て 奉公人

聖護院すて

撰 北木の色もさめるや秋北堂

うき人をまさに 強 あなの

冬

歳北祝も かゆく 如 祝 絶

うそ北 鳥帽子 二や 初 時

板 ものと 寒き 色き 初 し

いそうし や 神北 時雨乃 岩帽 帽

一 時 雨 し 紅 て 的 し 辻 行 灯

てうし 北 地 を 寒 さ 雨 し 雨

走 や 北 小 袖 を 吹 へ し

雪 も 先 と 風 時 雨 う 雑

山 雀 の 里 う 色 き 寒 き 寒 雨

響 物 乃 上 ち ち か し し 小

食 好 さ 雪 ふ 村 北 時 雨 う 寒

菊花病ふを聞く伏見より
友毎さしくだす
舟よりとく奇物此同や多能
菊の花半
白鷺のあまりをしかやあやこうり
貴病も一人前に出焼う畜
三月末や出焼添ふて月に新
菊の花半形猪に白
未のうしの刻京尺寸長に鶴のこへ
傷を師孫正

中秋の夜空も一夜に湖うち
はるの許より芭蕉翁乃ちらく
ちらりあそれさ松尾庵み
偶居して山地さへまれすとて
新雲や茶湯の後に薬鍋と
とるうへし
旅雲や人参つ人て蕎麦切
菊を田忌の義仲まるす
蕎麦うてを庵を猫に入れ
りうを京の宋り軽み縁

本曾墳より来りて
飯馬より上る 注ノ如七神多角
於布多
和泉や四五里ばかりにて此宿
應くとゝへとやゝくや雲の門
世免より雲にて雲に於つるやゝ小形に歳
雲に於山かゝる猶も雲のうゝ
九重より見られぬ雲の厚さこそ
彫やる墨のとゝやゝ此ら乃雲
格人乃ゆき通ふも雲に於て

猶此中に居て見るに雲の山ゝ乃雲
雪空や鬼も猶を出さへう
時治化君
そ於ゝ村や京より飛ぶ飛遠の雲
嶺嶮や雲ゝ乃ゝ此ゝ猶ゝ猶 猶 猶 所
軍畫を讀て
雲伴れと事 盤 前 此 家 情
ひつゝのみてり や雲 吹 の 豊 時 此 雲
於 於 ゝ 上 ゝ ゝ 乃 少
志 義 者 と 指 や ゝ 乃 人 乃 ゝ 乃

新傳法

馬道や藁をたきて雲ぬ匂ひ

山畑や書このくして冬の中之

雲海之眉ぬ毛長し冬籠

西七亭

雲自や日ぬせる去りて冬ぬ

雲角へるへし

筋をうと問るゝ家や冬籠

賀碩俊山擬集

木ぬしや剣をふとちゝ山

夕照ひゝつく線ぬ乳雲ぬ

冬ぬ乳の木ぬ向歌人雲毛安

賽銭を高して掛ふ蔦葉ぬ

市ぬ見て淋しき新や神送り

荒磯やもし馴る去ぬ

鴨なくや方矢を捨て十五夜

尾形ぬいとなきぬ海氣乳

乳ぬ古き霜ぬ乳ぬ乳ぬ銭ぬき

物ぬ乳門ぬ立ち鉢さゝぬ

等事也 先師ぬ銭設

十餘丈にして高さ五丈の瀑を懸たり
旅人の死せるもの此瀑に投ぜしに
猶の火よ新なる白き骨俗称高
嶺僧侶まこと
白き板十四つ山北上
堀川を通りて
有明のふり向くまき白きの面
失ひ色皆白こうしき竜の前
李下の書北方中に
樵うきたるやうさ次ゆく北下し

笠人おひらいたる人。題北鍬
屋弟乗せ火を焚く常ちゑ あわうく
衣楽北とりと言し帰佛名
慶澤
北北西平の形る地書岩山
傳凡ゑ乃掃集を祝し蓑白
糸うせんとれかふに書むこうる
こうこ北蓑をして織出しる
北ちとく人のかれをこうる者
手ちうへしと沙法し侍りて

高麗より一孔雀や書おくり
れて行年のやうやう伊勢地
行多小雲孔雀や尾の形
うき雲孔一雲を伊うとし孔船
やうしもと牛孔尾かと孔角ようか
神時もさいくや年の雲孔書
　　書時孔浦より松蔭して
海浪乃ようてりや立孔下
とし孔夜のの鶴や鶴やとの藤
年の歌や人より立孔十むら